鈴木サナエ（すずき さなえ）

春の女神　ギフチョウ

今年も春先、我が家の庭に「コシノカンアオイ」の花が咲いた。カンアオイの葉は、常緑で、徳川家や、会津松平家の家紋のモデルになってるフタバアオイの仲間なのだが、なんせ地面を這いつくばうように伸び、地面すれすれに暗い紫色の花をつけるので、よくよく見なければ見つけることもできない。マニアには人気の花であっても、普通には見たことがある人は、案外少ないのではないだろうか。

コシノカンアオイの葉に産み付けられたギフチョウの卵

そんなコシノカンアオイの花を分けてくれたのは、山の大ベテランの多美子さんだった。多美子さんは春浅い、わずかな期間に飛翔するギフチョウが、このカンアオイの葉に卵を産み、幼虫は柔らかな葉を食べることなどを教えてくれた。あれから三十年もたってしまったけれど、私はまだ一度もギフチョウを見ていない。雪解けを待って、今年は是が非でも只見でギフチョウの飛翔を見てみようと心に決めていた。

ポカポカと暖かな春の日、私はギフチョウを探しながら林道を分け入った。ひとつ目の林道は沢の音を聞きながら、随分奥深くまで歩いたけれど、いない。ふたつ目、雪もまだところどころに残り、ギフチョウが蜜を吸うというピンクのオクチョウジザクラも咲いている。ワクワクしながら歩き、もう里では当に花が終わってしまったカタクリの群生地にたどり着いた。そこで適当な倒木をベンチに仕立て、座ったり、近くを歩いたりしながら、三十分余りも過ごしただろうか、しかし、そんなに簡単に見つかるはずもなく、心を残しながら、仕方なく引き返すことにした。だいぶ歩いて、陽も傾きかけて、ぼんやりと歩いていたその時だった。

ギフチョウ

いた、いた。たった一頭だけれど、林道の水を求めて、何度か吸水を繰り返しながら、私の目の前を優雅に飛んでいく。ついに出会えたのだ。あの黒と黄色のゼブラ模様は確かに春の女神さまのギフチョウだ。濃い赤やブルーの特徴ある模様もくっきり見える。まるで「撮ってください」と言わんばかりの飛び方だったが、やがて、林の中に消えていった。

後日、虫の専門家に写真をみて頂いたら、多分かなり年老いた雌だろうということだった。